

さ SA く KU ら RA



Jan.2019

発行/ボーイスカウト世田谷第5団広報部

ビーバー隊

12月9日 クリスマス会準備

ビーバー隊隊長 草嶋隆行

昨年に続いて今年のスタントも今年の活動ふり返りとしてしました。まずは、今年の活動を黒板に書き出し、楽しかったもの、辛かったものを参加スカウトから意見を聞きます。楽しかったのは圧倒的に夏のお泊まりでした。一方、辛かったのは前月にやった東京タワー、理由はいっぱい歩いたからでした。去年は、両方スタントにしましたが、今年は、東京タワー企画が楽しかったものの2位だったことと、いっぱい歩いたという理由が活動の狙いでもあったので、楽しかった企画のみにしました。

次に、お泊まり企画の流れを黒板に書き、スカウトが具体的にどんな出来事が楽しかったのを書き出していきます。2日間の活動で色んなことがありましたが、こちらスカウトの意見で、座禅、キャンプファイア、天堂さんの怪談の3つを取り上げることにしました。

さて、本番はどのようになったのでしょうか？



12月23日 クリスマス会

ビーバー隊隊長 草嶋隆行

恒例のカブ隊との合同クリスマス会です。いつも通り、参加スカウトがバラバラになり、カブの組のお兄さんとゲームを進めていきます。まずはソングに続いて伝言ゲーム。今年は割と簡単だったようで、例年より正答率が高かったと思います。

いよいよ、スタントの発表です。2週間前に練習しても、ビーバーの場合は忘れちゃったりであまり意味がないことが多いのですが、プログラム再現型のスタントは比較的楽にできます。永島副長の座禅、保科副長のキャンプファイア、そして初の試みの保護者スタント、最後に天堂副長の怪談と、内輪ウケだったかもしれませんが、何とかうまく出来たと思います。

そして、ジェスチャーゲームや間違い探しゲームをして、最後にプレゼント交換をして終わりました。

スカウト、そして見学された保護者の方にはカブ隊の雰囲気や、組単位で競争するカブ隊の仕組みなどを少しは感じて頂けたと思っております。

最後になりましたが、年度途中ではありますが、今年も無事に活動できて良かったと思います。リーダーや保護者の皆様、ありがとうございました。



カブ隊

12月9日 クリスマス会準備

CS隊 副長 中村静香

今年も早いものでクリスマス会の季節になりました。毎年恒例クリスマス会の準備で今年も工作、クリスマスソングの練習、スタンツの練習を行いました。

工作は、毎年何にしようか迷いますが雑貨屋で早めに見つけた20^号四方の紙のパズルにクリスマスに因んだ絵を油性マジックインキで書き、仕上げにキラキラシールを飾りつけて貰いました。クリスマスツリーやサンタクロースといった定番の他に美味しそうなお肉の絵を描いたスカウトがいて見ていて楽しかったです。

その後初めての試みで組ごとにパズルを完成させるゲームを行いました。

今年のスタンツのテーマは「帽子」です。スカウト達がどんな演技をするかクリスマス会を楽しみにしています。

3組 うさぎ

準備も楽しくできて、クリスマス会も楽しくできたから良かったです。来年も楽しみです。

4組 くま

来週のクリスマスパーティーのため、今日の活動は歌とスタンツ練習したり、パズルを作成したりして、楽しかったです。パズル絵の構成と描くのはなかなか難しく、完全するまで結構時間が掛かりましたが、いい思い出ができて良かったと思います。



12月23日 クリスマス会

カブ隊 副長 中村静香

毎年恒例カブ&ビーバー合同クリスマス会が開催されました。

今年もゲーム、クリスマスソング、スタンツ、プレゼント交換と盛り上がりしました。今年のスタンツのテーマは「帽子」です。各組「帽子」を取り入れたスタンツを披露してくれましたが、色々な職業の帽子の役目を演じてくれた2組のみごとスタンツ賞を獲得しました!!

今年も残り少なくなりました。来年も元気に活動に参加しましょう!!

4組 DL 和田 緑

毎年恒例のクリスマス会ですが、伝言ゲームやジェ



スチャーゲーム、スタンツなど、経験したことのある子も初めての子もそれぞれツッコミを入れたり、大声で笑ったりしながらとても楽しんでいる様子でした。今回のスタンツは「ぼうし」というテーマで、私自身は話を作るのが難しかったですが、練習時間が少ない中でも各組の個性が出ていてとても良かったと思います。

1組 うさぎ

クリスマス会のスタンツは4位でしたが、がんばったのでよかったです。

クリスマスプレゼントの交かんが一番うれしかったです。もらったクッキーはすぐに食べてしまいました!

2組 うさぎ

ぼくはスタンツで工事現場のおじさんをやりました。スタンツで1位になれてうれしかったです。今後の活動もがんばりたいです。



ボーイ隊

12月16日 隊集会 (地図とサイン)

@尾山台小学校ランチルーム

BS隊 オットセイ班

ぼくが一番興味を持ったのは、手旗です。色々な種類があり、遠い場所に人がいても、その人とコミュニケーションがとれることが、すごいと思いました。地図の座標や自転車ハイクの注意点などを、学ぶことができました。

BS隊 カモメ班

今回の活動は、手旗信号をやったり、地図を使ったりとてんこ盛りでしたが、座標の見つけ方を覚えたり、手旗信号のはじめ方、終わり方を教わったりできました。手旗信号は、1~14の数字を覚えるのにそこまで時間がかからなかったのも、この調子で、ひらがなの「ア」~「ン」を覚えたいです。

BS隊 トナカイ班

今回は久しぶりに活動に参加しました。みんなと久しぶりに楽しく活動が出来たので嬉しかったです。

また、今回は難しい事や新しい事をたくさん学んだので実際に使えるようによく復習しておきたいです。

そして、次回の自転車ハイクに向けての準備を念入りに行いました。

自分でしっかりと準備をして次回の自転車ハイクに備えたいと思います。



12月23日 自転車ハイク @多摩湖(埼玉県)

BS隊 カモメ班

久しぶりの自転車ハイクだったが、今回は前回よりも楽に感じた。
加えて前回よりも楽しく走れたので、とてもいい日になったと思う。
しかし転倒してしまうことも何回もあったので、また参加するときは気を付けたい。

BS隊 カモメ班

今回の自転車ハイクは、尾山台図書館から出発して、多摩湖まで行きました。
行きの道でぼくは、途中2回転びましたが、大きいケガではなかったので、無事ゴールにたどり着きました。
帰りは、小雨が降ったりやんだりしていましたが、行きより走っている時間が短かった気がします。
69Kmも自転車で行ったのは、生まれて初めてのことで、最初は、走りきれぬかどうかが不安でしたが、走ってみると案外楽しかった。最後にゴール場所で、保護者の方がチーズハンバーガーとポテトを差し入れてくれて、みんなで飛びあがって喜びました。
次の自転車ハイクが待ち通しくなりました。

BS隊 カモメ班

多摩湖までの道のりは長かった。転倒がいくつかあり、その中に自分が関わっていたものもあった。
次はもっと安全に運転したい。

BS隊 トナカイ班

今回はサイクリングでした。本格的に長い距離を走るのは初めてだったので、正直不安でした。しかし、今回荷物を少ない状態で臨めて、いつもより軽々と動けました。途中では雨など降っていましたが、みんな雨に濡れるのを嫌がっている反面、楽しんでいて、自分もとても楽しめました。サイクリング中に通った場所などでは川や湖坂さまさまな人、電車など見ている、漕いでいても楽しめました。次回は夏涼しい時にやるらしいので、楽しみにしています。予定が入っていないことを願っています。班員はお互い声をかけて、「車来てるよー」とかお互いに言っていてこれが雨が降っているにもかかわらず、無事に帰って来た理由だと思いました。
今回班員だけでなく、団でも絆を深めることができました。



BS隊 トナカイ班

今回は尾山台から多摩湖まで往復約60kmの距離を自転車で行きました。
天気もよく、風もあまり吹いていなかったため、とても気持ちよく走ることができました。
多摩湖では、景色が良く、みんなと話すのも楽しかったです。
しかし、帰りは最後の方で雨が強く降って危なかった事もあり、疲れが溜まりました。
それでも普段中々、みんなで自転車ハイクをする事ができないのでとても充実した1日になりました。
そうすることが出来たのも、リーダーの方々やローバー隊の方々が計画を練って下さったり、サポートして下さいましたお陰だと思います。本当に有り難うございました。
また、参加したいと思います。

BS隊 トナカイ班

僕は、今回が初めての自転車ハイクでした。
最初は60km完走できるか不安でしたが、班のメンバーたちと話しながら、楽しく完走することができました。
また、今回の自転車ハイクのコースは、僕が昔住んでいた花小金井や、よく使っていた多摩湖自転車道を通るコースなので、なつかしみながら走りました。今回、一番きつかったのは、途中で自転車のギアがこわ

れてしまい、ギア1の3で走らなければいけなかったことです。小平駅から多摩湖までずっとハイペースでペダルをこがなければならなかったため、とてもつかれました。
途中で雨も降り、ぬれながら二子玉川公園まで着いた時は、すごい達成感でした。
ギアが壊れたのはきつかったけど、60kmも走った感覚がなく、疲れもそれほどなく、楽しい自転車ハイクでした。

BS隊 トナカイ班

80キロ走ると言われて、かなり緊張したけど、思ったより余裕があって、楽しく走れた。
帰ってすぐ入った風呂にうっとり。
次の日は筋肉痛で、特に脇の下が痛かった。変な力が入っていたんだと思う。
自信につながったね、と母に言われた。

BS隊 トナカイ班

初めて自転車での長距離サイクリングを最後まで頑張ることができました。皆様のおかげで良い経験ができました。
ただ、もっと自転車を乗る練習をしなければいけないと思いました。



ローバー隊

「多摩湖サイクリング感想文」

ローバー隊 山根徳仁

解散して思う。

「無事に帰って来られて良かった」

ボーイスカウトで企画を担当するようになってから、楽しい・つまらないという感想とは別に、ホッとしたという感想が浮かぶことが多くなった。

今回の企画はボーイ隊の多摩湖サイクリング。感じたことや教訓を話そうと思う。

1. スカウトから気づかされた3つのこと その1

スカウト達はこちらが想像した以上に体力がある。往復70kmもある道のりを、小学生もいる中ほぼ予定通りに走り切ったことに驚いた。おそらく、スカウトの体力に関するリーダー側の想定がだいぶ慎重だということだろう。スカウトは思った以上に強い。次のサイクリングではもっと攻めた想定でも良いのかもしれない。

ただし、スカウトの体力を慎重に見積もること自体はそれはそれで正しい。こちら辺は、チャレンジと慎重さの適切なバランスをとることが企画者に求められる。今回そのバランスを計画段階で練ることの難しさを知った。

その2

スカウト達は周りの景色をよく見ている。自分の普段の何気ないサイクリングとは随分違う。あるスカウトは「あんな所変わった建物がある〜！」と叫んだ。見てみるとだいぶ遠い。彼らは遠くの景色までよく観察しているのだ。

歳をとると、見える景色は想定内のものだらけになる。経験が増えるのだから必然だ。それに反比例して、ある種の観察力、つまり「あんなものがある！」という感動を伴った観察力は低下していく。代わりに「ああ、あれがあそこにあるな。病院はどこかな」のような確認作業としての観察力が増す。それはそれで大切なことだけれども、瑞々しい観察も出来るだけ維持しなければならなかった。そのためには大人なりのやり方、例えば視点の変更や高度な観賞が必要だろう。

その3

スカウト達はチェックポイントを小さなゴールに見立てていた。自分はなにをする時も、最終目的やゴールだけを意識して動きがちだ。しかしスカウト達は、途中のチェックポイントに到着するたびに、いちいち達成感を感じて嬉しがっていた。こういう小さな達成感を一つ一つ感じることで、彼らはモチベーションを維持することが出来る。

いや、これは我々だって同じだ。大人になるとだいぶ先まで物事を見通せるようになるので、ついつい目の先の事態に脱力して関わるようになる。局所的には

なく大域的に眺めることは、企画者としてたしかに必要なことだ。しかし「木を見て森を見ず」という態度も、忘れないでいたい。一つ一つのチェックポイントに一喜一憂する大人でありたい。

2. サイクリング中に感じたこと：安全第一

天気やペース配分、スカウトの体調など心配することは多くあった。そんな中、一番心配だったのは事故だ。歩行者や車との接触・単独事故・自転車同士の接触など、事故には様々なケースがある。先頭を走りながら、常に後ろが気になって仕方なかった。しかも今回は地面が雨に濡れて滑りやすい。皆普段より意識して走行したが、それでもリーダー含め転倒した回数は指では数えきれない。

しかし安全確保についても、スカウト達は良くやってくれた。曲がる時や左右に寄る時は常に合図の手信号を送っていたのだが、帰り道ともなると、手信号を見たスカウト達は「左寄って〜！」などと後ろの仲間に声を出すようになった。だんだん(確認作業の意味で)周りが見えるようになっていったのに感心した。

そこでふと思う。ボーイスカウトに限らず、何かを企画して行動するときには「安全第一」だとよく言われる。しかしこの言葉、考えるとよく分からない。もし本当に、完全に安全第一で、100%の安全が確保されなければ企画を実行してはならないとしよう。すると、100%の安全確保など不可能である以上、自転車ハイクは中止して家で大人しくするのが一番である。そしてこれは、自転車ハイクをはじめとするボーイスカウト活動に限らない。全てのことに言える。

仕事でもスポーツでも、あるいはもっと極端に言えば外を歩くことだって、安全第一を徹底するならやめた方が良い。事故を、その発生確率と発生した時の深刻さの掛け算、すなわち「リスク＝発生確率×深刻さ」で評価しよう。すると、現実的にはリスクは0に出来ないので、リスクが最も低いであろう「家の中でずっと引きこもる」のような選択が、安全第一のスローガンの元では常に選ばれることになる。

これはおかしい。実際には、楽しさや自己成長などのポジティブな価値とリスクとのバランスを我々はとっている。「安全第一」はこのバランスを、リスク側に寄せることを言っているに過ぎない。あるいは、この言葉は安全・リスクを人の心に意識させるためのまさに「スローガン」なのだから、そんな論理的・数値的に考えること自体が不適切とも言える。

そんなことは、「安全第一」を唱える人は十分に分かっているのだろう。つまり「安全第一」は、「これは安全だろうか」という視点や確認作業の観察力を我々にもたらす「機能」が大事なのであって、その文字通りの「意味」はさほど重要ではない、というわけだ。

この言葉は100年ほど前のアメリカで生まれた。製鉄会社USスチールの社長で熱心なクリスチャンでもあったエルバート・ヘンリー・ゲーリーが、「生産第一、品質第二、安全第三」であった経営方針を「安全第一、品質第二、生産第三」に変えたことから来ている。そ

して実際に、USスチールの労働災害は劇的に減ったのである。

しかしそれでもなお、「安全第一」の文字通りの意味が気になってしまう。また同時に、上で述べたことは「安全第一」の解釈を脇においたとしてもそれ自体として問題である。だから、ここで終わってはいけない。「安全第一」が確かに有効なスローガンである以上、それに疑いを持っただけのこの段階で話を終えるのはマズい。

3. なぜ人に相談することが大事なのか

我々は、完全に安全第一の人生を善いものとは思っていない。何かしらのリスクをとってでも、危険なチャレンジをして善き人生を送りたいと思っている。自転車ハイクの企画で言えば、最終目的は「リスクを0にする」ではなく「自転車ハイクを楽しむ」であるはずだ。問題は、ではどの程度しっかり安全管理をして、どの程度までリスクを減らせば良いのかである。

「出来る限りリスクを減らすべし」では、スローガンとしては良くても、論理的な解答にはならない。「自転車ハイクを中止して家に引きこもる」ことになってしまうからだ。「自転車ハイクの目的を設定し、それを達成する範囲で出来る限りリスクを減らすべし」ではどうか？ これも実はダメである。「出来る限り」を文字通り受け取る限り、ちょっと考えれば分かるようにいくらでも金と時間と人をかけてリスクを減らすことが出来てしまうからだ。

どれくらいが良い塩梅なのか？

バランスや塩梅などと言っているが、難しいのは「事故のリスク」と「自転車ハイクの楽しみ」とを数値比較できないことだ。いやいや、市場原理的に全てをお金に換算することは可能だ、という意見もあるかもしれない。それは確かにお金の魔術的機能ではある(本来記号化できないはずのものを記号化してしまう、という魔術)。しかし、普通に考えてやはり「リスク」と「楽しみ」とは数値比較不能だ(本来記号化不可能なも

のを、資本主義はお金という形で強引に記号化している。その歪みが様々な社会問題を生んでいる、というのはよくある説だ)。

もしかしたら、「計画者が安全について(事故発生後の対応の想定も含めて)自信を持っていれば良い」という意見もあるかもしれない。しかしこれはよく考えると危うい。計画者の性格等に安全性が大きく左右されるからだ(計画者が楽観的過ぎると、安全確保が明らかに不十分なのにも関わらず自信を持ってしま

かもしれない)。だから、良いバランス・良い塩梅を決めるためには、周りの人に意見を求めることが必要である。周囲の反応を伺うことで、安全管理についての落とし所を決める。つまり安全管理について色々な人に相談することの目的は、一つは様々なリスクを大きさに順に把握することであるが、もう一つは把握したリスクに対してどこまで安全施策を実施するのが妥当であるかの認識を共有することなのだ。

スローガンやモットー、そして「ちかい」や「おきて」は、その文字を眺めるだけではいけない。その中身について考え、独りよがりやを排し、周囲と相談して良い塩梅に落とし込んでいくこと。ボーイスカウトのスローガンとモットーはそれぞれ「日々の善行」と「そなえよつねに」だが、その意味について説明し、さらに「ちかい」と「おきて」について隊長と話し合うことが進級課目として設定されていることは重要である。

今回の多摩湖サイクリング企画は、私にとって学びの多い経験だった。

もちろんその最終目的は、私自信の学びでも安全第一でもなく、スカウトの皆が楽しむことである。

スカウトの皆が、自転車の爽快感や仲間と一緒に走る楽しさを感じ、またサイクリングに行きたいと思ってくれたら嬉しい。

次は、目指せ100km超え！（もちろん「安全第一」で）



科学と詩 第11回（第2部第1回，短縮版）

ローバー隊隊長 渡口要

（つづき）

あけましておめでとうございます。
今回から、「科学と詩」の第2部です。前回までが理論編だとすれば、今回からは実践編のつもりです。抽象化や普遍化は控えめにして、具体例を中心に「科学と詩」にまつわる様々な話題を紹介していこうと思います。

11. 科学は美を破壊するか

B-Pがビクトリア十字勲章を授与され、前年にはアインシュタインが日本を訪れていた1923年、詩人田村隆一が生まれました。田村39歳のときの詩集『言葉のない世界』。その中の「帰途」という詩の冒頭は次のように始まります。

*****引用開始*****
言葉なんかおぼえるんじゃなかった
言葉のない世界
意味が意味にならない世界に生きていたら
どんなによかったか
*****引用終り*****

この詩をどう「よむ」かは各人の自由です、もちろん（詩ですから！）。
私はこの詩（および田村の他の詩）を通して、言葉のない世界に憧れ近づきたいと思いながら、しかしその接近を言葉によって行う矛盾を考えたい。しかもその矛盾は、本来世界はただそこにあるだけで記号化などされていないにも関わらず、人間はそれを記号を通して知ろうとしてしまうという意味で、科学者と同じである。つまり科学者が世界（自然）を理解するために記号＝科学の言葉を使うこと、典型的には物理学者が自然を理解するために記号＝数学を使うことの不思議さについて、2017年さくら8月号：8.ニュートンと数理物理学（＝数学＋物理学？）とは別の角度で考えたいとも思うのです。
「言葉のない世界」に接近する科学者と詩人の2つのアプローチ。その「同じさ」を探るために、以下ではまず「科学は美を破壊するか？」という問いを考えます（田村の問題意識については、次回以降考えます）。そうすることで、2018年さくら1月号：科学と詩第1回で述べた科学と詩の「相容れない感じ」を、科学の側から多少挑発的な言い方で壊そうと思うのです。

11.1. キログラム「kg」の定義変更

2018年さくら10月号：科学と詩第10回の最後で、ノーベル物理学賞を予想しました。残念ながら外しましたが、「レーザの革新的な研究と応用」が授賞理由である点で、香取秀俊先生の光格子時計と分野的に近い研究でした。おしい！（実は、ノーベル物理学賞が与えられる研究分野には2年乃至4年の周期で、ある程度のパターンがあります。それを知っていれば、今年はレーザ関連が来そうだと予想できました）。

今回のノーベル物理学賞も、2017年さくら12月号：14. 2017年ノーベル賞についての連想ゲームで述べた

のと同様、人類に「新たな眼」をもたらす研究でした。ここでは説明しませんが、一体どのような意味でレーザ技術が「みる」ことを可能にしたのか、調べてみてください。検索キーワードは「光ピンセット」と「アト秒」です。

ところでノーベル賞予想は外しましたが、そこで述べた質量の単位である「kg」の定義が見直される見通しについては、11月16日にフランスで開催された国際度量衡総会にて予定通り決議されました。2019年5月20日からは、「1kg」の定義が変わることになります（ただし、皆さんの日常生活には何の影響もありません）。歴史的な決議でした。かつては、「ほら、この分銅の質量が1kgだよ」・「この定規の長さが1mだよ」というやり方で、つまり「実物」を使って単位が定義されていました。ところが今回、最後まで実物での定義として残っていた「kg」がプランク定数による定義に変更され、原器（実物）が完全に排除されるのです。この話題はそれほど盛り上がっていなかったようですが、分かる人には分かる重大な決議です。例えば私の父は、この件に関して私と事前に話していたわけでは無かったにもかかわらず、以下のLINEを国際度量衡総会中へ送ってきました。分かる人には分かるその興奮を感じ取っていただければと思います。

*****引用開始*****

要へ国際度量衡総会で、キログラムがプランク定数で定義される歴史的決議が2時間後に行われる。
今、ノーベル賞授賞者がプランクのビジョンについて講演中。
BIPMで検索せよ。
BIPMのHPのYouTubeに記念講演が4つあり面白い。
来年のノーベル賞は、プランク定数のfixに貢献した者に与えられるかも。
*****引用終り*****

11.2. 檸檬の質量

ところが、です。この「kg」の定義変更に関し、私から見て「趣味の悪い」報道が複数ありました。その中の1つに、東京新聞の2018年11月16日朝刊に掲載された「筆洗」というコラムがあります。「さくら」やボーイスカウトのHP上に「悪い例」として紹介することにやや躊躇いはありますが（もしかしたら関係者の方もいるかもしれませんが）、新聞のコラムですし、「科学と詩」を考える上で格好の題材なので、以下に引用します。

*****引用開始*****

筆洗
憂鬱だった〈私〉は、一個のレモンを手にした時から、幸せを感じる。梶井基次郎の代表作『檸檬』にある有名なくだりだ。〈つまりはこの重さなんだな…この重さはすべての善いものすべての美しいものを重量に換算して来た重さである…〉

鮮やかな黄色と手の中に収まる大きさ、形、手触り、そして高揚した心を思いながら、その重さに想像力を働かせてみる。そんな場面だろうか。何グラムかは知れない。軽くも、とてつもなく重くも思える〈この重さ〉である。

重くなったり、軽くなったり、解釈の余地があってはならない重さの定義が、約百三十年ぶりに変わるのだという。フランスでの国際度量衡総会で「キログラム」の定義変更が諮られる。

変更となれば、日本国キログラム原器は来年、お役御免になるらしい。一メートルや一秒などは、すでに定義に膨大な数字が登場し、人の実感から懸け離れてしまった。

簡単に「原器の質量」で定義されてきたキログラムは残された大物のようだが、極小分野の科学の進展などで、誤差を排除する必要が生じていたという。物理学の「プランク定数」で記述されるそうだが、直感からは懸け離れている。時代の要請はよく理解できる。が、物理学の言葉で書かれる新定義に、何ともしれないよそよそしさを感じる。少なくともレモンの重さを表現するのには向いていないだろう。（東京新聞 2018・11・16）
*****引用終り*****

いくつかの論点があるうかと思えます。

ある人は、このコラムに何の問題も感じないでしょう。「分かる人には分かる」などという言葉で科学知識についての優位をひけらかし、「人の実感」を嘲笑う。そんな理系の傲慢を撃ち抜くことが、このコラムの目的の一部なのだ、そこまで思う人もいるかもしれません（もちろん、戯画的に誇張しています）。

またある人は、「文系の馬鹿がくだらない文章を書いたな」と思う理系であるかもしれませんが、インターネット上では、このような理系の傲慢が悪目立ちします。

もっと冷静に、「世の中で起こっていることを読者に分かりやすく伝えるのが新聞の使命なはず。にも関わらず、所詮コラムであることを言い訳に、キログラムの定義変更の意義理解から読者を遠ざけることを書くのはいかがなものか」と反応する人もあるでしょう。つまり報道・教育的な見地からの批判です。これには私も同意します。

しかしここで私が言いたいのは、このコラムが文学的・詩的な文章であるとして（梶井基次郎を引用しているのですから、明らかに文学的效果を狙っています）、科学的に高度な単位改定の話に対する拒否（あるいは嫌悪）が、その文学的・詩的な価値を貶めているということです。

檸檬を構成する原子・分子のミクロな挙動に想いを馳せつつ、原子・分子1個分の質量誤差には遠く及ばないものの、ミジンコや砂粒の質量程度の誤差でその檸檬の質量を測定してやろうということのロマン。あるいはそんな科学的描写をいこうしようとビクともしない、梶井の書いた詩情の素晴らしさを考えるだけで、科学よりもむしろ詩（文学）に対してこそこのコラムは無礼である。私はそう思うのです。

11.3. ニュートンと虹

さていよいよ、「科学は美を破壊するか」という問いを直接的に考えてみましょう。この問いに答えた何人かの科学者の言葉を追うことで、先ほどの檸檬のコラムがいかかに「詩（文学）に対して」無礼であったかが、改めて納得されると思います。

もう何度目になるか分かりませんが、再びニュートンに登場してもらいましょう。ニュートンは重力理論や運動の理論とは別に、光の理論（光学）にも多大な貢献をしました。

光の理論について考える中で、ニュートンは虹という自然現象を解明しました。これに対し、18世紀から19世紀初頭にかけての詩人や画家、いわゆるロマン主義者たちの間にニュートンを批判する人たちがいました。

曰く、
「虹は神秘を奪われた」
「ニュートンは虹をばらばらの色にすることで、虹がもつ詩情を台無しにした」
などなど。

ニュートンのせいで、我々は虹を蝕知できなくなった。物理学という「色眼鏡」を通してしか虹を視れなくなってしまった。要するに、ニュートンが虹の仕組みを明らかにしたのは興ざめな行為だったというわけです。

これに対し、『利己的な遺伝子』の著者として有名な1941年生まれのイギリス人進化生物学者リチャード・ドーキンスは、ロマン主義者たちによるニュートンへの「文学の詩情の破壊者」というレッテル貼りに対し、『虹の解体』の中で
「スペクトルの発見に代表されるニュートンの研究こそは人類の知見を大きく広げることに貢献したのであり、結果として宇宙へのセンス・オブ・ワンダー（sense of wonder）を生み出し、詩情の源泉となる」と反論しました。

スカウトの皆はどう思いますか？科学は美を破壊すると思いますか？
もちろん私はそう思いません。むしろ、少なくない数の人が何故「科学は美を破壊する」と思ってしまうのか。それこそが問題です。これに関して私は、次のように挑発的に意見を述べたいと思います。
もしあなたが、科学的知識によって虹の美が破壊されると感じたとすれば、それは以下に述べる2つが原因の幼稚な錯誤に過ぎない。

第1に、あなたの科学についての勉強がまったく中途半端だということ。そのため例えば「虹とは、太陽の光が空気中の水滴によって屈折・反射されるときに、水滴がプリズムの役割をするため光が分解されて、複数色（日本では7色とされる）の帯に見える現象である」という辞書的な説明をただ字面として読んで、「なんか興ざめだ」と判断しているのです。虹という現象の背後にある豊かな科学的知識・数理物理学的知識・数学的構造について深く勉強すれば、そのような判断がいかにか軽率であるかが分かるはずです。

第2に、あなたが虹に見出していた詩情的な美がまったく表層的だということ。真に優れた詩的感受性やその表現は、科学による対象の解明によって損なわれるものではありません。ニュートンが虹を科学の眼で解き明かしたとしても、虹に関する詩情はビクともしない。もし科学による対象の解明「ていど」のことで詩情が失われたと感じたとすれば、あなたが感じていた詩情は、いかにもそれらしい綺麗な言葉を並べて「なんかいいね」とぼんやり思っている程度のものだったということです。

11.4. 谷川俊太郎

科学と詩は、それぞれを表層的にしか知らない人にとっては相反するもののように思われがちです。しかし、それらはむしろ互いを刺激しあう関係にあると思ふべきです。

アインシュタインがある種の美意識によって一般相対性理論を作ったのは、詩(情)が科学を刺激した好例です。それに対し科学が詩を刺激した好例として、田村と並ぶ日本現代詩の大物、1931年生まれ谷川俊太郎を挙げられます。有名な処女詩集『二十億光年の孤独』に収められた「二十億光年の孤独」を読んだことがある人は多いでしょう。

*****引用開始*****

人類は小さな球の上で
眠り起きそして働き
ときどき火星に仲間を欲しがったりする

火星人は小さな球の上で 何をしてるか
僕は知らない
(或いは ネリリし キルルし ハララしているか)

しかしときどき地球に仲間を欲しがったりする
それはまったくたしかなことだ

万有引力とは
ひき合う孤独の力である

宇宙はひずんでいる
それ故みんなはもとめ合う

宇宙はどんどん膨らんでゆく
それ故みんなは不安である

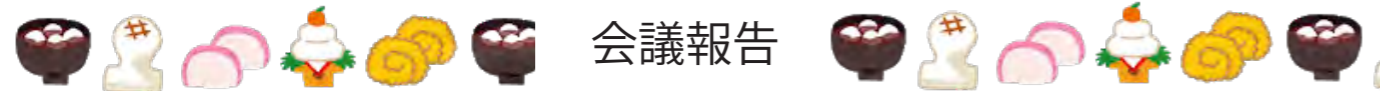
二十億光年の孤独に
僕は思わずくしゃみをした
*****引用終り*****

この詩に、ニュートンやアインシュタインの物理学が反映されていることは明らかです。

ただし、谷川の詩はあくまでも詩です。物理学の支配下にはおかれていません。谷川は、物理学的なイメージと詩的繊細さとを、彼のある種あっさりとした筆と感性で見事に結び付けている。宇宙のセンス・オブ・ワンダーが、谷川の詩の透明さの背後に透けて見えているようではありませんか。

谷川の詩には、科学と詩という2種の世界の把握法が「まざって」いるように見えます。そのことが、彼の作品に多くの人々が惹きつけられる大きな理由だと私は考えます(「ネリリ」や「キルル」といった言葉の機能については、次回以降で考えます)。

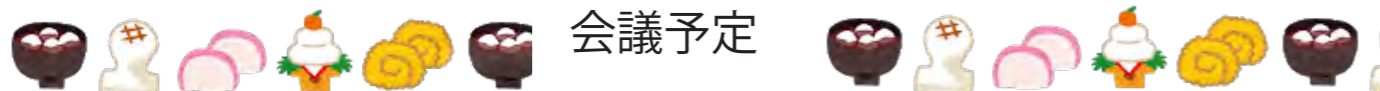
(つづく)



会議報告

団委員会・団会議 12月15日(土) 15:00～ 奥沢地区会館第3会議室

- ★ 各隊報告
 - ★ 育成会より 1/19 九品仏バザーに参加
 - ★ リーダーへのアンケート結果
- 育成会 12月5日 九品仏バザー実行委員会出席



会議予定

- 1月13日(日) 育成会役員会 9:30～予定 場所未定
- 1月26日(土) 団委員会・団会議 20:00～ 尾山台地区会館第1会議室

～育成会より～

< 九品仏バザー参加のお願い >

1月19日(土) 11:00～14:00

九品仏参道の餅つき大会にバザー参加をいたします。

当日のお手伝い・献品のご協力をお願い致します。詳細につきましては、前月のさくら12月号をご覧ください。

< 九品仏バザーシフト >

ご協力ありがとうございます。

(午前) 10:00～12:00 三園、中澤、長井、大野、佐藤(彬)、榎原、都築

(午後) 12:00～14:00 太田、近藤、河津、小針、石井、菅屋

担当：草嶋、舟橋



1月は隊費の集金月です。

今回は登録費も加算して振込が必要です。(登録費が値上がりします。詳細は、育成会からの「振込案内メール」をご覧ください。)

金額をご確認の上、10日までにじぶん銀行への振り込みをお願い致します。